

A  
LETTER  
From the AUTHOR of the  
ARGUMENT  
AGAINST A  
Standing Army,  
To the AUTHOR of the  
Balancing Letter.

---

*A False Balance is an Abomination to the Lord, but a  
Just Weight is his Delight, Prov. xi. 1.*

---

Vendidit hic auro patriam, Dominumque potentem  
Imposuit, Leges fixit pretio, atque refixit.  
*Virgil: Æn. L. 6.*

---

LONDON, Printed in the Year, 1697. .

『常備軍反対論』<sup>1</sup>の著者より『バランシング・レター』<sup>2</sup>の著者へ

欺きのはかりは主に忌み嫌われる。正しいおもりは主に喜ばれる。箴言 11.1

黄金のために祖国を売り、僭主の権勢を戴いたもの、  
金に動かされて法律の改廃をなしたもの。<sup>3</sup>

ウェルギリウス、『アエネーイス』第6巻 621-22.

(3)

『常備軍反対論』の著者より『バランシング・レター』の著者へ

雇われ三文文士がどれほど下劣な言葉を使っても私に返事を書かせることなど不可能でしょうが、これほどまでに丁寧な言葉を用いて紳士的な態度で狙いを定められると、ずっと恐ろしく感じます。「私は贈り物をもたらずギリシヤ人を恐れます。」

あなたは最後の段落で、この件は「きわめて難しく重要な問題であり、偽りの修飾語や大衆的な修辭を用いずに厳密に精査すべきものだ」と認めておられます。そしてあなたご自身は「自由を求める人間であり、自由を求める偉大な探求者であり、自由こそ偉大な財産である」と主張しておられます。あなたが、私が想像しているような紳士であれば、あなたの現在の財産はきわめて大きいものと思われそうですが、あなたは自由を獲得しようとしている偉大な探求者なのですから、そのためにあなた自身が尊大に構える必要はありません。これは、私が絶望的な運命にはないと述べる機会を与えてもらえることになり、私は自分自身で築いた財産を失うことよりも、先祖から受け継いだ財産を失うことを恐れています。

(4)

そしてこの短い序文の後、私は「偽りの修飾語も大衆的な修辭」も用いずにこの問題を吟味したいと思います。

あなたの手紙には以下の3点が示されていると思います。

1. あなたがお持ちになりたいもの、
2. どれくらいの期間それを持続されたいのか、

### 3. その理由はどのようなものなのか。

第一に、我が国は「世界にとって驚異とも思える名誉ある平和を享受しており、国民同士の敵意と嫉妬の他には我々を傷つけるものは何もない」とあなたは思わせたがっておられるようです。そして第二に、「この平和を維持するために地上戦力を維持したい」と述べておられます。さて、もし私の信念があなたと異なるとすればお許しを願わなくてはなりません。というのは名誉ある平和を維持するために常備軍を維持する必要があるのなら、それは名誉ある平和とは思えません。平和は武力行使の中断です。我々は安心して剣を鋤に、槍を刈り込み鎌に持ち代えることが出来るのです。そして国王陛下によって命じられた教会の祈祷書にこの平和にたいする感謝の祈祷文そのものが取り入れられています。そしてもし我が国のこの平和がこの指標に合致しないのなら、あなたが言われるような平和に恵まれていることにはなりません。しかし、実際には我が国はそのような平和を享受しているわけではないので（というのは、私よりあなたのほうがよくご存知のはずです）、この不完全さを埋めるためにあなたの主張にたいして議論を進めます。あなたは3頁で、我が国に地上戦力が必要だと思わせようとしておられるようですが、「あなたの考えは常備軍からはかけ離れています。」

#### (5)

さて、どのような常備軍を私が恐れているのか、はっきり述べさせて頂きましょう。国王の命令により殺戮のための剣やピストル、槍やマスカット銃、火薬や銃弾を使用する騎兵や歩兵が徴募されます。あなたの言われる「地上戦力」が一切このようなものを意味しないのなら、失礼ながら私はあなたとは意見が異なります。しかし、あなたの言われる「地上戦力」がこの記述とは相違するものと認められるまでは、私が「常備軍」という言葉で示しているものと同じものだと皆が思うでしょう。もしあなたが同じものを意味するとされるなら、常備軍に対して反対意見を宣言されたこととなります。そしてこれまでに目にしたこともないような洗練された文体で書かれた手紙においてきわめて明白な矛盾をおかしておられることとなります。

あなたが次に示しておられる事柄は、一年ごとに更新するとして、どのくらいの期間この「地上戦力」を保持し続けられたいのでしょうか。これはオランダで土地を貸与するときに用いられる契約を思い起こさせます。その契約では土地所有者は一年と一日ほど購入者に土地の権利を保証します。これは彼らの法律に従えば、永遠に、ということになります。そして私の考えでは、あなたが一年ごとと言われるとき、それは次第に分かるようになりますが、「永遠に」という意味なのでしょう。

三番目は、どのような理由であなたはこれを保持されたいのでしょうか。そして、まず、「あなたは国民が国王陛下に嫉妬心をいだくことを嫌われます。あたかも国王が衛兵を伴わずに国民の間にいることは安全ではないかのように。」しかし、現在の事態は、「我が国と近隣諸国の現状を考えると、たとえ分別を欠くことになろうとも、毎年、納得のいく戦力を維持することは我々にとっては必要でしょう。」

(6)

それであなたは外国のやり方を大いに強調されているように思われます。あなたは4頁で、「全世界、とりわけ我が国の近隣諸国は、強大な戦力を維持すべきだという誤った考えに陥ってしまい、たまたまこれらの中で最強の国が隣国です。この隣国はおそらく強大な軍隊を維持するでしょうし、我が国が無防備なままであれば彼らにとってあまりにも魅力的なものと映るかも知れません」と述べておられます。

さて、他国の流儀に関してお話ししましょう。神が「イスラエル人」に遵守すべき法を宣言され、礼拝や統治法においても他の国の流儀に従ったり、あこがれたりしないようにと命じられたことが思い出されます。そしてもし我々が戦力を維持するという点で隣国の方法を真似るなら、我々は彼らの統治法も真似なければなりません。常備軍を保持することがフランス王のやり方であり、その常備軍のもとで国民を奴隷扱いですのです。流行に溺れ、あらゆることで流行を追う人がいます。現在、常備軍のもとで自由を維持することは隣国の方法では不可能です。そして惨めな状態に陥ってしまうまでは、我々がその流儀に完全にはまってしまうなどとは決して思いつきもしないのではないかと恐れているのです。

しかし、あなたは流行のために流行を追い求めるほどの気取り屋さんではないことは分かります。しかし、常備軍の必要があるとお考えなのでしょう。というのは、あなたは近隣諸国に侵略されることを恐れておられるからでしょう。

(7)

「近隣諸国のなかの最強国はおそらく強大な軍隊を維持するでしょう。」ところで私が忘れてしまう前に、ここで、あなたの主張される一年ごとの保有期間について思い出して頂きたいと思います。というのは、あなたはこの主張において、「フランス」王が強大な軍隊を保持するという馬鹿げた考えを抱き続ける限り、我が国は地上戦力を持ち続けるべきだというお考えなのでしょう。その結果、一年ごとという言葉はすでに永久にという意味に

なっています。私としては、「フランス」王が軍隊を解散するまで自分の欲するものを待たされたくはありません。それゆえに、常備軍という言葉ではなく、穏やかな「地上戦力」という言葉で偽りの安心感を人々に広めて、あなたの提案に引き込まないで頂きたいのです。「議会の審議による一年ごとの契約で」などと。平明な言葉を使いましょう。そうすればあなたの提案は、あなた自身の理屈によれば、フランス王もしくはその継承者がフランスで常備軍を保持するかぎりイングランドでも常備軍を保持することになります。あなたが核心に触れるまでの言葉はすべて大げさな美辞麗句にすぎないので、まずあなたの論点を明らかにされた方がよいと思います。

さて、正直なところ、私はあなたと同様に君主の言葉や盟約はほとんど信用していませんし、彼らがそれらを実行するさいには誠実さよりも彼ら自身の利害関係に従うものだと思います。従って彼らに我が国を攻撃したいという気をそそらせることには反対です。そして常に我が国の危険に対して適切な防衛力を持ちたいと思います。自然はすべての生き物に自分たちを攻撃するものに対する武器を備えさせています。そして人間の知恵は自らの防衛手段としていくつかのものを作り出しました。今や我々の間の唯一の争点は誰の手にこれらの武器を持たせるかということです。

## (8)

この件について私の主張の18頁から26頁で論じてきました。それに対してあなたからはお返事もなく、答えようともされないのです。その点について再度あなたに申し上げます。実際に9, 10, 11頁であなたは我々に「訓練された正規軍は、そのような正規軍を含まない世界の最高、最強の市民軍よりはるかに優秀」だと述べておられます。しかしあえてあなたに述べさせて頂きますが、軍隊と同様に立派に訓練された市民軍も存在します。いやむしろ、我が国の軍隊は、解散されると、彼らのほとんどが市民軍に送り込まれます。そして、彼らが市民軍という名前が変わっても質の劣る兵士となるわけではありません。さて、あなたが提示されている歴史の例にかんしては、すべてに次の小さな反論だけをさせて頂きます。すなわち、あらゆる詳細について、あなたの考えは誤っています。すなわち、ペルシヤ軍は常備軍であり、帝国のいくつかの地方に配置されていて、あなたが偽って植え付けようとしておられるような市民軍ではありませんでした。そしてこれらの軍隊で彼らはいくつかの小国を容易に征服し、巨大な帝国の一部となし、常備軍によって防衛しました。しかし彼らがギリシアの市民軍と戦ったとき、彼らのすべての強大な軍隊は無力でした。この件に関してはクセノフォンの例があります<sup>4</sup>。彼は無数の軍隊が監視していたにもかかわらず自分の国土を三千マイルも一万人のギリシア兵とともに行軍しま

した。アゲシラオス<sup>5</sup>はもしギリシアの内紛で本国へ呼び戻されることがなければ少数のスパルタの市民軍でペルシヤ帝国を終焉させていたでしょう。強大なクセルクセス<sup>6</sup>の軍隊もギリシアの市民軍に壊滅させられました。いやむしろ、アレキサンダー大王<sup>7</sup>の軍隊の大部分はギリシアの各都市から集められた市民軍で成り立っていました。

(9)

あなたが示しておられるローマ人の例はあなた自身にとって大いに不利に働きます。というのは、自国周辺の、市民軍で対抗した少数の小さな共和国を征服することは、アジア、エジプト、また他の常備軍で対抗した専制諸国の占領よりも大いに困難でした。シーザー<sup>8</sup>がガリア市民軍<sup>9</sup>を征服したことがポンペイ<sup>10</sup>のアジア常備軍征服より偉業であったことを誰が否定できるでしょうか。そしてあなたは11頁で次のように述べておられます。「何もかも訓練されたローマ軍には対抗できなかったが、彼らの秩序が崩壊して市民軍となったとき、ヨーロッパ北方諸国は東方のサラセン人<sup>11</sup>と同様に、ローマ帝国を蹂躪しました。」私はこの正反対が真実なのだと言わせてもらわなければなりません。というのは彼らが市民軍で戦ったとき、全世界を征服したのです。しかし後に、皇帝時代になり、36万人の常備軍を保有していたとき、タキツスが認めているように、彼らはあらゆる蛮族国家に侵入され、蹂躪されたのです。

あなたのハンニバル<sup>12</sup>の例はまったく目的に当てはまりません。というのはカルタゴ人<sup>13</sup>はローマ人を打ち破ることはありませんでしたし、ハンニバルがローマの将軍を打ち破っただけです。彼は自分自身の戦闘以外で、勝利を得ることはありませんでした。そしてローマ軍が他の将軍と戦ったときには敗れることはほとんど無かったのです。

(10)

トルコ人<sup>14</sup>もまた周辺のすべての帝国を制圧したときよりもハンガリー<sup>15</sup>やエピロット<sup>16</sup>の市民軍を制圧することに多大な苦労を経験しました。スカンデルベグ<sup>17</sup>は少数の市民軍で彼らの多数の常備軍を相手にして22回の戦闘で常に勝利したのです。ユニアダス<sup>18</sup>とその息子マサイアス<sup>19</sup>は常に市民軍によって、トルコ常備軍と戦い、後世の人々にとってはほとんど信じがたいほどの戦果を挙げました。この市民軍は他のどのような軍隊にも劣らなかったと私は確信しています。

そしてあなたは「エリザベス女王<sup>20</sup>の時代にイングランドを守れたのはたまたま幸運に恵まれただけであって、いつも奇跡を当てにして生きていくことは出来ない」と述べて

おられますが、卓越した女王とその宮廷は意見を異にしたであろうと思わずにはおれません。スペイン<sup>21</sup>が敗北した後、女王や臣下がこのような独特な言い回しを議会で使われることはありませんでした。「みなさん、最近我が国がどのような危険を免れたかわかりでしょう。我々は神の摂理と幸運で国を守ることができましたが、いつも奇跡をあてにしてもらうわけにはいきません。常備軍を維持することが必要なのです。市民の防衛力に依存し続けるわけにはいかないのです。」女王はそのような馬鹿げた考えは蔑まれました。そしてそのような助言をして災いを招くような顧問は幽閉されたでしょう。この方は100年以上経ったあとで、女王とは反対の意見を述べておられますが、彼女は自分自身が国民に愛されて安全だと考えておられました。

しかしあなたは予告もなく奇襲されることを大変危惧しておられるようですし、5頁で先のラ・オーグ<sup>22</sup>やカレー<sup>23</sup>からの襲撃について述べておられます。「もし戦時であり、我々国民が相互不信に駆られていた時であれば、我が国は壊滅的な侵略を受ける危険がありました。

(11)

予告もなく、情報もなく、我々が危惧もせず、気づきもせず、怠惰に流れ静穏なときこそ、そのような陰謀がめぐらされることを思い知らされる可能性はるかに高いのです。」私は戦時における我々の情報についてはあなたと同様な意見です。しかしラ・オーグの件は話の種になっていましたし、それが起こる二ヶ月も前から官報<sup>24</sup>や他のあらゆる出版物に載っていました。カレーの件については、陛下が並外れた警戒心を持って、敵の海岸を70隻の船で奇襲されました。敵はそれを夢にも予想していなかったのです。また、我々の観察が戦時より平時の方がより困難だということは理解できません。というのは後者の場合にはすべての港が閉鎖され、交易も停止されます。それでいて前者の場合には港は開かれたままで、旅行者は外国へ行き、商船は航海中であり、大使は宮廷にいるからです。

8頁で、あなたは独裁的政府の顕著な特徴を示しておられます。そこでは人々は「破滅し、人々に期待される事柄を成し遂げることができず、彼らが指示された秘密を保つことも出来ない。そのような事情で君主は、自由な政府のもとで生活している人々には思いもよらない方法で物事を実行できます。」もし自分たちの義務を達成することが出来ず、秘密も守れないような人々が罰を受けずに無事でいられることが自由政府の特徴だとすれば、その証人はたくさんいます。しかし彼らを罰することが自由政府と矛盾するという理

由が私には理解できません。

(12)

そして結局のところ、あなたは常備軍が好ましくない結果をもたらすことに私と同様に懸念しておられるように思えます。14頁で常備軍の危険性について語られており、「これは広範囲にわたる分野であり、歴史はこの種の例に満ちあふれており、この件について徹底的に論じることは容易でしょう。ローマ近衛兵団<sup>25</sup>から我々の現代の軍隊まで、常備軍のきわめて恐ろしい例を十分に集めて示すことが出来るでしょう。」そしてその後、15頁で、「常備軍にいくつかの不都合が懸念されることは否定しないので、もしこの常備軍が必要不可欠と思えないのなら、私はあなたを説得しようとする気はありません」と述べておられます。さて、私はあなたが言われる絶対必要不可欠という言葉は、この軍隊が無ければ近隣諸国が我が国を侵略し、我が国の艦隊や市民軍をどのように運用しようとも、我が国を守れないと確信しておられるのでしょうか。そのような必要があるのかないのか、私の主張を参照して頂きたく思います。そしてそのような必要がないとすればあなたはその質問を放棄されることになります。というのは、あなたは事実上、一方では、ある程度奴隷化されてしまう可能性を認めておられますし、他方が偶発的な破滅を招くことでしかないとすれば、どちらが有利であるかは容易に決められます。しかしあなたは議会が軍隊を取り締まると言っておられますが、軍隊が議会を取り締まることはあり得ないというのは確かなのでしょうか。もし彼らが毎年毎年維持され続けるなら、確実ではあり得ません。「シーザーは全身全霊をもって自分の軍隊を10年以内に組織化しました。」

(13)

もし10年という年月が軍隊を墮落させる確実な年月とすれば、我が国の軍隊はすでに9年間も維持されていることをお考えいただきたく思います。しかし私はあなたと同様に現在の君主にたいして嫉妬心は抱いておりません。それでも、害にもならないような軍隊は何の役にも立たないと敢えて言わざるを得ません。

外国軍に対抗するために十分な戦力を持つ常備軍は国内において国民を抑圧するために十分な戦力があることを考えずにはおられません。というのは、この常備軍は、我々を征服する能力があるとお考えの軍隊を撃退しなければならないからです。そして、正直に言いますと、私は彼らの善意に任せるつもりはないのです。

15頁であなたは私を嫉妬に駆られ、憂鬱で臆病で、恨みを抱いた人間だとお考えのようですが、おそらくあなたがその一つはお持ちだとしても、私は一切持ち合わせておりま



せん。さあ、あなたの財産を失うことを恐れないでください。あなたが勝者となるような地上軍をあえてあなたに提案させてもらいましょう。

そして敗者となってしまうことをあなたが恐れておられる軍隊の勇敢な紳士諸君にかんしては、あなたと同様に彼らの勇氣に喜んで報いたいと思います。しかし我が国の艦隊が奇襲を受け、信頼を裏切り、我が市民軍が臆病で、あらゆる情報、忠誠心、勇氣などすべてが常備軍にあるというのであれば、私の力の及ぶところではないと申し上げなければなりません。

## (14)

8頁であなたは、「先の御代における自分たちの行動がどうであったかは忘れたかのよう、突然きわめてすばらしい愛国者になったり、専制政治をひどく警戒し、公共の自由をひどく熱望したりするような人を目にするにはありそうもない」と述べておられます。さて、正直に言いますと、先の御代にきわめてすばらしい愛国者であり、専制政治を忌み嫌い、公共の自由をひどく熱望した人々がいたことよりも、他の人々が昔成し遂げたと言われているものと同様な役割を精一杯果たしてくれる人がいるということを目にする方がうれしく思えます。

私がこの手紙を書き終える前に、私はあなたの手紙の10頁にある一文に注意を払わなければなりません。あなたは、「この国が自由に飽きて、美德も、叡智も、さらにはその政体を維持しようとする力もなくしてしまうような致命的な時代になってしまえばすぐにも、この国はすべてを投げ捨ててしまい、あらゆる法律や、ありとあらゆる障壁を投げ捨ててしまいます。人間が不死身でないように政府も永遠に続くわけではありません」と述べておられます。これをあなたがお持ちと思われる、次の行で述べられている常備軍の危険性について思慮深く考えながら、それでも常備軍を保持することが必要不可欠だと言われることと結びつけてみると、あなたは我々に致命的な時が来たのだというお考えを明白にほめかしておられることとなります。しかしあなたより賢明な方が破滅を計画していたとしても私はイングランドにはいまだ我が政体を維持するために十分な美德があることを疑いません。

結論として、我が国には満足出来る政府があり、国王は法律を執行されるために必要なすべての権力をお持ちです。すべての爵位は平等な権力の配分に依存しています。そして釣り合いを越えた権力を持つようになった人間は（というのはあなたや私の権力は釣り合

いがとれているので) 他の人々から爵位を奪い去り、権利もない領地だけを残していますが、それは君主の意のままになる財産の保有権にすぎません。

(15)

さて、もし議会在イングランドのすべての土地をこのような保有権に委ねれば、疑いなくあなたや私の財産は国王陛下の在位中は我々自身の所有物と同様に安全なものになるでしょう。それでもなお、あなたがおっしゃる法案を提出されると断言されるなら、私が常備軍について述べたことはすべて無駄なこととして甘んじます。

お返事を頂けることを願って結びの言葉とします。

敬具

終わり

### あとがき

本稿は以下のパンフレットの翻訳である。

*A Letter from the Author of the Argument against a Standing Army, to the Author of the Balancing Letter.* London, 1697. (以下、*A Letter* と呼ぶ。) 1697年12月に出版されたこのパンフレットは例によって著者名は示されていないが、1697年10月に出版された、*An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a Free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy*, London, 1697 (以下、*An Argument* と呼ぶ。)と同様に John Trenchard (1662-1723) と Walter Moyle (1672-1721) の共著とされている。*An Argument* 出版の日付については Lois G. Schwoerer の10月説と A. Downie の11月説がある。

この *A Letter* は政府側の代表ともいべき大蔵卿ジョン・ソマーズ (John Somers, 1651-1716) の1697年11月に出版された *Letter, balancing the necessity of keeping a land-force in times of peace, with the dangers that may follow on it*, London, 1697 (以下、*Balancing Letter* と呼ぶ。)に対する反論とされるものである。「パンフレット戦争」とも呼ばれた当時の常備軍に対する賛否両論の応酬のなかでも、ソマーズの *Balancing Letter* の文章は丁寧で格調高いものである。当時のヨーロッパにおける軍事情勢については小林幸夫氏の『図説 イングランド海軍の歴史』、原書房、2007年に詳しい。

これらパンフレット論争の発端となった状況については拙論、「17世紀イングランド常備軍論争 (翻訳)」『近畿大学語学教育部ジャーナル』第3号、2007年3月の「あとがき」

参照。

### 注

- 1 『常備軍反対論』、*An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a Free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy*, London, 1697.
- 2 『バランシング・レター』、*Letter, balancing the necessity of keeping a land-force in times of peace, with the dangers that may follow on it*, London, 1697. これは『常備軍反対論』の出版後、議会開会の12月3日までの間に書かれたと想定されている。
- 3 訳文は以下の翻訳書からの引用。岡道夫・高橋宏幸訳、『ウェルギリウス アエネーイス』、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、2001年。
- 4 クセノフォン Xenophon (c.426B.C.-c.355B.C.) 古代ギリシアの軍人、歴史家。ギリシア人傭兵(重装兵約1万名)の頭目に選ばれ、厳冬のアルメニア山中の退却行軍を指揮した。ペルシアとスパルタとの戦争勃発とともに、スパルタ王アゲシラオスの下で騎兵指揮者として各地に転戦した。平凡社、『世界大百科事典』。
- 5 Agesilaus アゲシラオス二世 (444?-c.360B.C.)。スパルタ王 (c.400-c.360B.C.)。
- 6 Xerxes クセルクセス一世 (519?-465B.C.)。アケメネス朝ペルシア帝国の王 (486?-465B.C.)。ダリウス一世の子で、第3回ギリシア遠征を企てたがサラミスの海戦で大敗した (480B.C.)。
- 7 アレキサンダー大王 Alexander the Great (356-323B.C.)。マケドニアの王 (336-323B.C.)。その領土はギリシア、小アジア、エジプトからインドにまで及んだ。アルゲアデス朝のマケドニア王、コリント同盟の盟主、エジプトのファラオを兼ねた人物である。ギリシア語ではアレクサンドロス大王であるが、英語風に読んでアレキサンダー大王またはアレキサンダー大王とすることも多い。
- 8 Caesar シーザー (c.100-44B.C.)：ローマの将軍・政治家・歴史家；第1回三頭政治を組織しガリアを征服した (58-50B.C.)；ポンペイウスを破り独裁者となったが、間もなくブルータスらに殺された。『ガリア戦記』の著者。
- 9 Gallick militia または Gallic militia ガリア人の市民軍
- 10 Pompey ポンペイウス (106-48B.C.)：ローマの将軍・政治家；第一次三頭政治を敷いた一人；シーザーの女婿となったが、のち対立。
- 11 Saracens サラセン人、イスラム教徒。
- 12 Hannibal ハンニバル：(247-183B.C.)：第二ポエニ戦争中ピレネー山脈およびアルプス山脈を越えてイタリアに侵入したカルタゴの将軍。

- 13 Carthaginians カルタゴ人：カルタゴはアフリカ北部、今のチュニスの近くにあった古代都市国家；紀元前 9-8 世紀ごろにフェニキア人が建設；紀元前 146 年ポエニ戦争 (Punic Wars) の最終戦でローマ軍に滅ぼされた。
- 14 The Turks トルコ人、オスマン帝国 (the Ottoman Empire) の住民。オスマン帝国における常備歩兵とその軍団であるイエニチェリが有名。この軍団は 16 世紀末までは、オスマン帝国軍の精鋭として規律正しく、王朝の発展に貢献した。
- 15 Hungarian ハンガリー人。ハンガリーは地理的にオスマン帝国に隣接し、トルコのヨーロッパ侵攻の入り口の位置を占めていた。
- 16 Epirot または Epirote. ギリシア北西部およびアルバニア南部、エーペイロスの住民。
- 17 Scanderbeg もしくは Skanderbeg スカデルベグ (c.1404-1468)。アルバニアの革命指導者であり、中世アルバニアの民族的英雄。スルタン、ムラド二世の宮廷で人質として成長。1443 年オスマン帝国のアルバニア攻撃に際し故国へ脱出し、民族独立を求めて反乱を起こし、ムハマド二世に対抗して北アルバニアを統一した。以後 25 年間、オスマン帝国軍から国土を守った。平凡社、『世界大百科事典』および *The Columbia Encyclopedia*, 6th Edition, 2008.
- 18 John Huniades もしくは Hunniades、Hunyady ユニアダス (1388?-1456)。ハンガリーの民族的英雄。トルコに対してヨーロッパ東部の最前線にあたり、その侵攻に対抗して戦った。
- 19 Matthias Corvinus マサイアス (1443-1490)。ハンガリー王。ユニアダスの子。
- 20 Queen Elizabeth I エリザベス女王、エリザベス一世 (1533-1603)。チューダー朝のイングランド女王 (1558-1603)。ヘンリー八世とアン・ブーリンの娘で異母姉メアリー一世の後継者。チューダー朝最後の君主で、彼女の後はスコットランド王ジェイムズ六世がイングランドに入り、ジェイムズ一世と称し、スチュアート朝になった。1588 年のスペイン、アルマダ艦隊襲来に際して司令長官チャールズ・ハワードのもと、私掠船船長フランシス・ドレイクや貿易商人ジョン・ホーキンスなどが国中の艦船を動員して対抗した。5 月 20 日、スペイン無敵艦隊がリスボン港を出撃するが、艦隊の練度も士気も拙劣で、そのうえ悪天候のため甚大な損害を被り、さらに 7 月 20 日の「プリマスの海戦」から 21 日の「ポーランドの海戦」、22 日の「ワイト島の海戦」を経て、7 月 26、27 日の「カレー沖海戦」、27 日の「グレーヴラインの海戦」が展開され、スペイン艦隊は作戦を放棄して、敗走する。最も信頼すべき記録によれば、アルマダの損失はガレオン艦 26 隻を含む 63 隻の多きを数えたが、戦闘で喪失したのは四隻に過ぎなかった。その他は、荒天によるもの 24 隻、さらに行方不明が 35 隻である。…要するに…自滅したのである。それに加うるに、自然の猛威がアルマダ

にとどめを刺したわけで…イングランド海軍史もこの強風をしばしば「神風」とよぶ。『図説 イングランド海軍の歴史』、119頁～122頁参照。

- 21 Spaniards スペイン人この当時、世界はスペイン、ポルトガルが植民地争いで覇権を争っており、1493年にローマ教皇アレクサンドル六世がスペインとポルトガルの海外勢力圏の分割調停をした（教皇境界線、植民地分界線ともいう）。アレクサンドル六世はスペイン出身の教皇のためポルトガルに不利な境界線であったので、翌年両国独自にトルデシリャス条約を結び、新たな境界線を策定した。
- 22 la Hogue もしくは La Hougue ラ・オーグ。フランス北西岸沖の停泊所；フランス艦隊が英国・オランダ艦隊に大敗した海戦の地（1692）。王政復古により王位に復帰したチャールズ二世のもと、当時のヨーク公ジェームズはロード・ハイ・アドミラルとしてネービー・ボード長官ピープスとともに海軍再建に携わり、海軍の近代化を着々と推進していった。『イングランド海軍の歴史』、195頁～196頁参照。「1692年3月、前国王ジェームズがラ・オーグ岬へ赴くが、ここには多数の輸送船が集結し、大規模な部隊がイングランド侵攻作戦の発動に備えていた。」この海戦は5月19日より始まり、24日までにフランス艦隊は壊滅的敗北を喫した。「前イングランド王ジェームズは、この「ラ・オーグ湾の襲撃戦」を陸岸から見守っていたが、かつて手塩にかけて鍛え上げたイングランド艦隊が、自らの王座復帰の望みを打ち砕くのを目の当たりに」した。『図説 イングランド海軍の歴史』、236頁～238頁参照。
- 23 Calais カレー。ドーヴァー海峡に臨み、英国に最も近いフランス北部の港市；1347年イングランド王エドワード三世が占領したが、1558年1月、ギーズ公フランソワ（Guisé, 1519-63）に奪回された。1694年から1696年にかけてイングランド艦隊が攻撃を仕掛けた。
- 24 *the Gazette* 「官報」。
- 25 Praetorian 「プラエトリアニ」。ローマ皇帝の護衛兵。初代ローマ帝国皇帝アウグストゥスは帝政を創始すると、精鋭部隊は戦時だけでなく平時においても有効と考え、プラエトリアニを募るようになった。またアウグストゥスは自分の身を守るためには何らかの組織が必要と考え、1部隊500人を9つ編成し、徐々に部隊の人員数を1000人にまで増員していった。そして9つの部隊のうち3つをローマ市に、そのうちの1つを皇宮に配備させた。アウグストゥスが14年に没したときプラエトリアニは何事も起こさず、ティベリウスへの帝位の移行は円滑に行われたが、これは最初で最後の事例で、これ以降プラエトリアニは皇帝への忠誠心よりも自分達の利害によって動くようになり、自ら皇帝を暗殺したり、後継皇帝を指名したりするようになった。ミルウィウス橋の戦い（312年）に勝利したコンスタンチヌス一世（Constantine I）がプラエトリアニを解散させ廃止した。Wikipedia.